高校・岡山県知事賞

「声の遺書」から

倉敷市・倉敷南高２年　大西　真由

人間魚雷「回天」。太平洋戦争末期、海軍が開発した特攻兵器。搭乗員になった、当時二十一歳の塚本太郎さん。彼は、学徒出陣の壮行式の後、レコードに二分半の肉声を残していた。大変、貴重な「声の遺書」である。

彼は、家族との何気ない日常を懐かしく語り、こう言うのだ。

「僕はもっと、もっといつまでもみんなと一緒に楽しく暮らしたいんだ」。彼の率直な言葉。心の内が痛いほど分かる。

しかし、当時の日本は戦争下。「特攻」として、命を引き換えに敵艦に体当たりすることは「名誉」とされていた。よって、彼は自らを奮い立たせるかのごとく、こう言葉を続ける。それは、声のトーンにも表れているという。

「…家族の一員である前に、日本人である」と。「人生二十年。余生に費やされるべき精力のすべてをこの決戦の一瞬に捧げよう」。この揺れ動く彼の言葉から、「建前」と「本音」の複雑な思いがひしひしと伝わってくる。その時代に生き、逃れることのできない環境の中で、愛する家族のために「死」を目前に自らの「声」を残した塚本さん。どんなに辛かっただろうか…。日本のために、自らの命を捧げた多くの若者がいたことを、彼らの声を、私たちは決して忘れてはならず、こうして、残してくれた遺書や、遺品を後世にできる限り残していかなければならない。

戦後七十年に合わせて、ＮＨＫが世論調査を行った。「広島と長崎に原爆投下されたのは何月何日か？」。日付を尋ねた結果、正しく答えられた人は、全国で三割ほど。三割？信じられない。このままでいいのか。残念なことに「終戦の日」さえ無関心な国民が増えているという現実。危機感を覚える。

今を生きる私たちは、塚本さん達のように精一杯生きているだろうか。尊い命を大切にしているだろうか。人のために尽くしているだろうか。恥ずかしくない言動ができているだろうか。…反省させられる。私たちの今日は、彼らの犠牲の上にある。彼らが叶えられなかった夢、未来。今、高校生である私は、自分の夢を実現するために、一生懸命勉強しようとせめて思った。そして、微力でも、社会に貢献したいと強く思う。

「特攻」に行かざるを得なかった人々は、日本の未来を思い、希望を託した。私たちは彼らの「希望」である。彼らの無念を、戦争の怖さを決して忘れてはならない。私たちがすべきことは何か？　日本が行った戦争の歴史に、今こそ真剣に向き合い、私たち一人ひとりが、しっかりと正確な事実を知ること。そして、そこから日本の「未来」と「平和」のために、信念を持って、よりよい社会を創っていくことである。私たちの「義務」だ。

特攻学徒 残した肉声

戦後70年

学徒出陣で特攻隊員になった大学生が家族に「声の遺書」を残していた。家族に囲まれた平穏な暮らしから、死が待つ戦場へ――。レコードに録音された2分半の肉声からは、生と死の間で揺れ動く若者の心情が浮かび上がる。戦時下、録音機器は一般的ではなく隊員の音声記録は貴重だ。

2分半、家族へ思い

音声を残したのは慶応大1年のときに出征し、人間魚雷「回天」の搭乗員になった塚本太郎さん（当時21）。1943年10月、学徒出陣の壮行式の後、東京・銀座で広告関係の仕事をしていた父親のスタジオで別れの言葉をふき込んだ。

▶人間魚雷「回天」　太平洋戦争末期、海軍が開発した特攻兵器。1.5トンの爆薬を積んだ全長14.75㍍、直径1㍍の魚雷の中央部に1人が乗り込み、潜水艦から発進。コンパスや計算を頼りに魚雷を操縦し、敵艦に体当たりした。

終戦までに訓練を受けた搭乗員は1375人に上り、そのほとんどが学徒や学生出身の予備学生、兵学校・機関学校出身の若者だった。回天記念館（山口県周南市）によると、戦没者は145人で、没時の平均年齢は21.1歳。

「もっと一緒に暮らしたい」
「人生20年。元気で征きます」

音声を収めたレコードや家族のアルバムを前に、当時の様子を語る塚本悠策さん（千葉県松戸市）

レコードを託された母親は戦後、太郎さんの遺品を家族の目に触れないようにしていた。太郎さんの12歳年下の弟、悠策さん（80）が母親の死後、遺品を整理していた際に見つけたという。

「僕はもっと、もっといつまでもみんなと一緒に楽しく暮らしたいんだ」。2分半の音声の前半、太郎さんは家族との日常を懐かしく振り返る。川辺で遊んだ春の日、夏祭り……。月見に出かけて、崖下のススキを取りに行った思い出のくだりでは「あそこで転んだのは誰だったかしら」と家族に語りかけている。

声のトーンが変わるのは1分が過ぎるところ。「しかし僕はこんなにも幸福な家族の一員である前に、日本人であることを忘れてはならないと思うんだ」。日常生活と決別し、戦地へと赴く自分を鼓舞するような言葉が続く。「人生二十年。余生に費やされるべき精力のすべてをこの決戦の一瞬に捧（ささ）げよう」。最後は「みんなさようなら。元気で征（い）きます」と結んだ。

悲壮な決意を聞いた悠策さんは「肉親の声とは思えなかった」と話す。

入隊した太郎さんは44年9月、回天の搭乗員に志願した。訓練基地があった山口県周南市の大津島から出撃。45年1月21日、西太平洋のウルシー海域で敵艦に突っ込んだ。

当時疎開していた悠策さんは、新聞で兄の死を知った。「悲しいというより、立派だなと思った」。家族の死を実感したのは疎開先から一時帰宅した時。「焼け野原になった自宅跡で母が泣いているのを見た。母を通してやっと兄の死を理解した」と振り返る。

繰り返し再生するうちにレコードの原盤は破損したが、「家においていては、いずれは価値がわからなくなる」と、コピーした音声を学生時代のアルバムとともに兄の母校に寄贈した。

音声は慶応大三田キャンパス図書館（東京・港）で開催中の戦争資料を集めた展覧会「慶応義塾と戦争Ⅲ　慶応義塾の昭和二十年」で、8月6日まで公開されている。慶応大での公開は初めてで、都倉武之准教授（35）は「同世代の学生が音声に耳を傾けることで、特攻で亡くなった学生が複雑で様々な心境を抱えながら出撃したという事実を知ってもらいたい」と話している。

（塚本太郎さんの音声記録を電子版に▼Web刊→紙面連動）

2015年7月22日付　日本経済新聞

寸評

戦後70年。戦争をテーマにした新聞感想文が多かった中で秀逸でした。若者が戦争に関心を持ち後世に伝え続けることの意義を訴えた、説得力のある内容です。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2016年2月20日掲載